

令和七年度

一般選抜第一期 入学試験問題

国語

注意

- (1) 解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。
- (2) 解答用紙は、鉛筆で記入してさしつかえない。
- (3) 解答は、解答欄に記入すること。
- (4) 下書きには、問題用紙の余白を使用すること。
- (5) 解答用紙は、一枚しか配付しない。
- (6) 試験終了後、解答用紙および問題用紙を持ち帰らないこと。

問題一

次の1～5の問いに答えなさい。

1 次の①～⑤の傍線部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 貪欲に楽しむ。 ② 時代に翻弄される。 ③ 安全性に懸念を抱く。
- ④ 作業が進捗する。 ⑤ 疑惑を払拭する。

2 次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字になおして書きなさい。

- ① 新たな契約コウシヨウをする。 ② 法律でキセイする。 ③ 庭のソウジをする。
- ④ ダキヨウ点を見出す。 ⑤ 試合のシユドウ権を握る。

3 次の①～⑤のことがらに当てはまる語をそれぞれア～オから選び、記号で書きなさい。

- ① さまざまなものに變化すること。
ア 明鏡止水 イ 古今東西 ウ 古色蒼然 エ 千差万別 オ 千變万化
- ② 最も大切な決まり。
ア 金科玉条 イ 金城湯池 ウ 巧言令色 エ 月下水人 オ 一心不乱
- ③ 外見と中身が違い、見かけ倒しのこと。
ア 羊頭狗肉 イ 本末転倒 ウ 夏炉冬扇 エ 喧々囂々 オ 得手勝手
- ④ しつかりした考えを持たず、人の意見に従うこと。
ア 片言隻語 イ 单刀直入 ウ 優柔不断 エ 付和雷同 オ 異口同音
- ⑤ 非常にまれな機会。
ア 天変地異 イ 乾坤一擲 ウ 千載一遇 エ 大願成就 オ 一衣帶水

4 次の①～⑤の語と、「」に示した関係と同じ関係になる語を、それぞれア～オから選び、記号で書きなさい。

- 「単純——複雑」
① 中庸 ア 変遷 イ 現実 ウ 特別 エ 極端 オ 絶滅
- 「進歩——退化」
② 繁忙 ア 閑静 イ 閑暇 ウ 縮小 エ 滅私 オ 猶予
- 「経験——体験」
③ 引力 ア 斥力 イ 万有 ウ 反射 エ 重力 オ 効力
- 「頻繁——陸続」
④ 大局 ア 局所 イ 所在 ウ 大勢 エ 危機 オ 大概
- 「形式——内容」
⑤ 直喻 ア 斜体 イ 曲想 ウ 比較 エ 虚構 オ 暗喻

5 次の①～⑤の傍線部の敬語を訂正して書きなさい。またその訂正した後の敬語の種類を語群から選び、記号で書きなさい。

- ① 私が先生に「お探しの建物はあちらにあります。」とお教えした。
- ② 私が先生からお受け取りになった著書です。
- ③ お客様が弊社の製品を拝見する。
- ④ お食事をいただいてください。
- ⑤ 今日の会議の結果をお聞きしましたか。

語群 ア 尊敬語 イ 謙譲語 ウ 丁寧語

問題二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は、戦後の、私たちの社会を日々体験し、生きてきて、公共性や「公」というものが、ぜんぜん根づいていないとつねづね思っています。誤解されている。そして、身についていないという感じがしています。

それは、戦前の教育に対する裏返しかもしれませんが、戦後教育が「私」を強調しようとすることに関連します。それはそれで意味があるのですけれども、そうすると、公德心が薄れたから愛国心を育ててはいけない、教育基本法を改正しよう、という話が出てきます。そして一昔前で言えば、保守と革新の綱引きになってしまつて、それを見ている子どもは、ますます公共ということがわからなくなる（笑）。そのくり返しです。

私が思うには、^②個人と公とは、A 関係にあるのではなく、まさに同じメダルの表と裏である。

自分が個人として幸せを追求していこうと思うと、他者がやはり個人として幸せを追求していることとどういう関係にあるのか、と考えるてはならないわけです。まず、矛盾してはいけません。自分が幸せになるために、相手を不幸せにしてしまうのではない。相手も同じことを考えた場合、自分も不幸せになってしまうわけです。なんとかここに調和を見出したいと思うわけです。すべての人間関係や社会関係は、そういうふうにできています。

お互いが幸せになるために、どうしたらいいか。それは、さまざまな社会的技術や制度の積み重ねであり、法律もその手段だと思います。

そして、このことこそ公共性ではないだろうか。

個々人が、自分の人生を大切に、日々生きていく。これは誰でもやることです。この延長上というか、この裏側というか、この足もとというか、このこと自身のなかに公共性がなかったら、公共性は決して根づかないだろうと思います。

その反対に、自分の幸せを犠牲にして、「公」のために尽くす、その分だけ自分は不幸せになるけれども、それは仕方がない——そういう関係はいやですから、誰だって公共性のことなんか関心を持たないし、考えないし、どうでもいいや、というおつき合ひのような話になってしまふ。あるいは、誰かやってくれば、というお任せの話になってしまふ。

日本の近代化は、たいへん不幸なことに、明治国家が上から近代化をして、民衆は頭越しのような感じだったので。そうすると、公共性を、国が独占してしまうわけです。税金も取る、軍隊もつくる。それから天皇というものがいて、「公」のために滅私奉公しなさい、「私」を犠牲にして国家のために尽くしなさい、と命令する。そういうかたちだったのです。

低開発国や、発展途上国ではこうなるのです。いきなり国家なんていうものをつくってしまった国は、最初のうちはそれでやるしかないのです、しかたがないのですけれども、しかしこの体験が、国家の総力をあげた戦争と惨めな敗

戦というかたちで終わった結果、国家は戦争をやらなくことにしようと決めたわけです。そしてまた六十年くらいたっている。その結果、戦争はやらない、徴兵制はない。税金は払っている。国は何をやればいいのか。そのへんが B としたまま、戦後という社会が続いてきた。法律についても、みんなあまり関心がない。(中略)

ところで、法とよく似たものとして、道徳があるので、法と道徳の違いについても簡単にみておきましょう。

法と道徳がどういう関係にあるかは、文化によっても違います。たとえば、儒教文化圏では、法と道徳はやや違ったもので、^③道徳のほうが価値が高く、法はやむをえない場合の手段だと考える。ただどちらも、社会をかたちづくるルールだと理解されています。

ヨーロッパのキリスト教文化圏では、法律は外形的な行為にかかわるもので、内面にはかかわらないと考えるようになった。道徳とは別のものです。

これは、宗教的寛容と関連する。信仰の問題は問わない。信仰とは無関係な、世俗社会として、国家をつくりましょう。^④行為の外形が、世俗社会をつくっているわけですから、それだけを法は問題にする。物を買う買わない、犯罪を犯す犯さないなど、日常生活を成り立たせる行為の集積が社会です。その裏で何を考えているかということは、いっさい法律の問題ではない。行為と内面がまったく分離するわけです。これが出発点。

もちろん内面があつて行為が出てくるわけだから、善い内面からは善い行為が、善くない内面からは善くない行為が出てくるはずだけれども、行為にあらわれない限り、善からぬことを考えてもかまわない。

いっぽう道徳は、人間として望ましい行動のことである。

法との関連で言うと、まず、法律に従うことは道徳的です。なぜなら法律は秩序をつくり出して、人びとの権利を守るわけですから。

ただし悩ましいのは、法律は人間がつくるものなので、正しくない法律、道徳的でない法律というものが、ありうるのです。不道徳な法律に従うべきか、というところで悩むのですね。たとえばドイツの兵隊に、ユダヤ人を強制収容所に連れていけという命令が出され、それが合法的だとすると、この法律に従うべきかどうか。この例からもわかるように、道徳と法律は別々のものだと考えたほうがいい。法には触れないが、道徳的に非難される行為もあるし、道徳的に問題がなくても、法が許さない行為もある。

道徳と似たものに、倫理があります。倫理とは

C

で、道徳は

D

である。そして道徳は、ふつうの人間にとって実行可能なものであり、非常に有能な人にだけ可能で、大部分の人ができないというようなことは、道徳として要求しません。でも倫理は、大部分の人にはできないかもしれない、ごく一部分の人にしかできないかもしれない、それでも要求する、少なくとも自分にはそれを課す、というものであつてよい。そういう意味で、個人的で、要求水準が高くていいものなのですね。こういう違いがあると思います。

倫理を意識するというのは、他の人はこう行動しているが、私には私のルールや格律があつて、そういうことはとてもできない。それをしてしまえば、私は私でなくなる、そう考える場合ですね。

(橋爪大三郎『人間にとって法とは何か』)

問一 傍線部①「公共性」について、次のア～オの中で「公」にはあてはまらないものはどれか。一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 町内会の清掃当番 イ 通学路の除雪係 ウ 図書館での読み聞かせ会
エ 保育園への通園バス オ 部活動への加入

問二 傍線部②「個人と公とは、A 関係にあるのではなく、まさに同じメダルの表と裏である」について

(1) 空欄Aにあてはまる語句を次のア～オから選び、記号で書きなさい。

ア 相互 イ 包含 ウ 対立 エ 因果 オ 従属

(2) 「個人と公」が「まさに同じメダルの表と裏である」とはどういうことか。五十文字以内で説明しなさい。

問三 空欄Bにあてはまる語句を次のア～オから選び、記号で書きなさい。

ア 理路整然 イ 簡單明瞭 ウ 堅忍不拔 エ 曖昧模糊 オ 事理明白

問四 傍線部③「道德のほうが価値が高く、法はやむをえない場合の手段だ」と儒教文化圏で考えるのはなぜか。五十文字以内で説明しなさい。

問五 傍線部④「行為の外形」を言い換えた部分を、文中から十六字で抜き出しなさい。

問六 空欄C、Dにあてはまる語句の組合せで適当なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア C 「集团的・社会的なもの」	D 「個人的なもの」
イ C 「家族的・同族的なもの」	D 「大衆的なもの」
ウ C 「大衆的・一般的なもの」	D 「世間的なもの」
エ C 「個人的なもの」	D 「集团的・社会的なもの」
オ C 「大衆的なもの」	D 「家族的・同族的なもの」

問題三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

歴史を、生命や宇宙が誕生し、それ以来続いてきた記録という観点から見直していくと、日本の伝統文化の中にも、その典型的な例を数多く見出すことができる。たとえば「稲作」を例にとれば、二千数百年前においては、それは当時としては最高水準のハイテクだったに違いない。そして、その先端技術をどのように受け止め、定着させ、継承してきたかという歴史を知ることが、いま、世界中で「ハイテク日本」と評価されるようになったわれわれ日本人の未来を考える上でも、きわめて意義深いことである。

そのような例として、最初に、日本文化の扇の a のような存在である伊勢神宮と法隆寺についてふれてみたい。

伊勢神宮を訪ねて、まず驚くのは、二千数百年前、縄文から弥生へ移り始めたころのライフスタイルのようなものが、原初の形を変えることなく、いまなお温存されていることである。それは ^① 一つの時代にあっても、私たち日本人が本来あるべき姿の原形を指し示しているように思えてならない。

伊勢神宮における一日の重要な儀式は、神様の食事を調理することから始まる。その調理に使う火は、毎朝、「火起こしの儀」で新しく起こす火である。伊勢神宮の歴史は、一五〇〇年とも、二〇〇〇年ともいわれているが、その間、この儀式は一日も休むことなく続けられてきた。しかも、その「火起こし」の方法は、ヒノキの板にヤマビワ製の芯棒を摩擦して発火させるという古代どおりのやり方で、途中で新しい方法に変えたという形跡は見当たらない。このことは、いったい何を意味しているのであろう。

火を起こすということは、古代においては大変高度な技術であったはずである。人類の「火の技術史」というべきものは、雨の日も風の日も、いつでもどこでも確実に火を起こすことができるという方法が開発されたとき、はじめて始まったといってもいいだろう。

そのとき同時に、テクニクやノウハウを確実に子孫に伝えることも必要になったはずである。いまのように文字もなければビデオもない時代、その最良の伝達方法は、教える者と教わる者がいっしょに作業をしながら次々と伝授していくことであった。「火起こし」の儀式は、そのことを確実に記憶づけるために印象的に演出され、儀式化されたものに違いない。そして、毎日反復することによって、次の世代へと確実に伝えられていったのである。

同じように技術を伝える儀式として古来伊勢神宮に伝わるものに、「稲作」にまつわる祭典がある。(中略)

先にも述べたように、「稲作」も二千数百年前は最高のハイテクだったに違いない。その技術は「火起こし」と同じように、子孫に伝えていかなければならなかった。しかし、一年にも及ぶ「稲作」の技術は、「火起こし」のように簡単に伝えることができない。だからこそ、古代の人々は祭りという儀式に技術の伝承を託した。そこには原初の稲作技術を伝えることへの ^② 深い思いがこめられていたのである。

それにしても、これらの祭りにしても、「火起こし」の儀式にしても、なぜ伊勢神宮では時代が下って新しい技術が開発されても、決してそれを採り入れず、頑固なまでに古い技術だけを伝えてきたのだろうか。

私が想像するのは、「伊勢」は〈文化〉が黒潮に沿って北上する際のベースとなる基地だったのではないか、ということである。「伊勢」から出発した伝道者たちは、稲モミと祭りとをもって全国に散らばり、文化を伝えた。彼らは、たどり着いた各地の特有の地理的条件、気象条件によって各種の実験、冒険、研究開発の必要に迫られたことだろう。そして、仮にそれらの試みが失敗したとしたらどうだろう。そのときに戻るべき場所、(A)文化伝道のベースキャンプが、まさに「伊勢」——どんなに実験、冒険をしても、いざとなれば原点回帰をすることで出直せる、それが「伊勢」の本質だったのではないだろうか。(中略)

ところで、江戸時代、俳諧を芸術の域に高めた俳聖・松尾芭蕉は、この伊勢からほど遠からぬ伊賀上野の人である。その芭蕉の芸術論に、「不易流行」の原則があることをご存じだろうか。芭蕉は、不易＝基本的永続性をもつ変わらないものと、流行＝その時代の新しい風・変化という、二つの相矛盾するものが同時に存在するところに芸術の本質

を見た。

変わるべきもの、変わってもいいものはどんどん変化していくが、絶対に変わらないもの、変えてはならないものがある。(B) 変わっていくがゆえに続いていく。これは生命のメカニズムである。

一見矛盾する二つのことが同時に起こるからこそ、生命は維持されていく。芭蕉の芸術論は、生命のメカニズムに非常に近いものがある。生物というものは、個体は必ず死滅する運命をもった短い命だが、遺伝情報はコピーされて世代を超えて乗り移り永遠に生き続ける。(中略)

一方、「b」なるものを象徴する伊勢神宮と対照的なのが、斑鳩いかるがの法隆寺である。

法隆寺は、隋や新羅などの先進文明の吸収に積極的だった聖徳太子が発願し、仏教の伝来とともに伝わった中国式の寺院建築技術を採用入れて、六〇七年(推古一五年)に建立されたものである。つまり、法隆寺は当時の「流行」の最先端をいくハイテク技術の結晶であった。その後、蘇我入鹿の襲撃による焼失などのために、再建されたり幾度もの補修工事を経ているが、法隆寺建立のとき、はじめてその姿を目の当たりにした人々は、あふれんばかりの異国情緒と、スケールの大きさに圧倒されたに違いない。

聖徳太子は、新しい宮をつくるにあたって、当時の交通の要衝に位置していた斑鳩の地を選んだ。斑鳩を東南に流れる富雄川は、南の奈良盆地で大和川に合流する。大和川は、北は生駒、南は葛城の山々に挟まれながら西に流れて難波へと通じる。難波からは、さらに瀬戸内海を介して中国・朝鮮などの大陸とつながる海路が開けていた。

(C)、斑鳩は、大陸からの使者が難波に上陸し、大和川をさかのぼって大和に入る入口地点に位置し、大陸からの先端的なハイテク技術がいち早く導入され、蓄積されるダムの役割を果たしていたのである。(中略)

これまで、日本人は、一見、軽佻浮薄なまでに新しいものに飛びつき、それを消化し、しかも同時に残すべきものを普遍的な形として結晶化するという作業を繰り返してきた。そこには求心力をもちながら分散し続けるという「不易と流行」の精神、あるいは自然との調和を尊ぶ精神が、技術の面でも深い影を落としていた。^③それが今日の技術大国日本を底辺でがっちり支えているのである。

いま、産業構造や国際関係が変化していくなかで、さらに大胆な技術革新が求められているが、問題は、その「不易と流行」の、何が不易にあたり、何が流行にあたるのかをしっかりと明察する深い知恵をもつことであろう。その見極めを間違えないようにしたいと祈る心境である。

(石井威望『日本人の技術はどこから来たか』)

問一 空欄aにあてはまる語を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 的 イ 舞 ウ 軸 エ 骨 オ 要

問二 傍線部①「いつの時代にあっても、私たち日本人が本来あるべき姿の原形」とはどういうものか。本文中の言葉を用いて、五十字以内で説明しなさい。

問三 傍線部②「深い思い」とは、どのようなものであったか、五十字以内で説明しなさい。

問四 空欄bにあてはまる語を、文中から抜き出し、漢字二字で書きなさい。

問五 括弧A、B、Cにあてはまる語を、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ そして ウ さらに エ いわば

問六 傍線部③「それ」の指す内容を文中から五十字以内で抜き出し、その最初の五字を書きなさい。

